

奄美大島嘉徳川の甲殻十脚類について

鈴木廣志¹・岡野智和²・大元一樹¹

On Crustacean Decapods in the River Katoku of Amami-Oshima Island

SUZUKI Hiroshi¹, OKANO Tomokazu² and OOMOTO Kazuki¹

1: 鹿児島大学水産学部

2: 鹿児島県立大島高等学校

1: Faculty of Fisheries, Kagoshima University

2: Prefectural Ohshima High School, Amami-Oshima

要旨

2015年夏季の8月28日、9月26日、および10月13日の3回、奄美大島南部に位置する嘉徳川の下流域においてタモ網による甲殻十脚類の採集調査を行った。その結果、7種168個体の甲殻十脚類が採集された。このうち、スジエビ属のスジエビが少数ながら毎月採集された。

はじめに

従来、スジエビ属スジエビ *Palaemon paucidence* は東アジア固有の種で、その南限は屋久島までと言われていた。一方、屋久島より南に位置する奄美大島は中琉球最大の島であるにもかかわらず、その陸水域における生物相調査は今まで、断片的にしか行われていなかった。2014年～2015年にかけて行われた奄美大島全域にわたる調査で、同島南部の嘉徳川にスジエビが生息していることが明らかにされ報告された(鈴木ら 2015)。現在も同地において系統的調査が継続され、淡水域のみならず、汽水域も含めた同島の陸水産甲殻十脚類の多様性とその特徴が解明されつつある。

本報告では、系統的調査の一環として嘉徳川で確認されたスジエビが遇来的に採集された結果なのか、あるいは分布南限の変更に至る定住なのかを明らかにする目的で、2015年8月から経月調査を開始したので、その中間結果を報告する次第である。

方法

2015年8月から毎月一回、奄美大島南部の嘉徳川において陸水産甲殻十脚類の最終調査を行った。採集には目合い2mm、間口25cmのタモ網を用い、河川の下流側において、上流からキック・アンド・スィープ法で行った。採集した甲殻十脚類は持ち帰り、種の同定、雌雄の判別、甲長・甲幅を計測した。

結果

8月28日の採集調査では、ヒラテテナガエビ12個体、ミナミテナガエビ4個体、スジエビ2個体、スネナガエビ14個体、ヌマエビ13個体、トゲナシヌマエビ2個体が採集された。9月26日の調査では、ヒラテテナガエビ7個体、ミナミテナガエビ10個体、スジエビ2個体、スネナガエビ34個体、ヌマエビ12個体、トゲナシヌマエビ6個体が採集された。10月13日の調査では、ヒラテテナガエビ20個体、ミナミテナガエビ6個体、スジエビ10個体、ヌマエビ5個体が採集された。採集時間及び人数が毎回異なるので、採集個体数をそのまま比較することはできないが、テナガエビ類ではヒラテテナガエビのほうがミナミテナガエビより多く出現し、スジエビ類では、スネナガエビのほうがスジエビより多く出現すると考えられる。また、嘉徳川ではヌマエビがヌマエビ類では優先していると推測された。

また、各種の平均甲長及び最大一最小の経月変化を見ると、ヒラテテナガエビでは6.5(3.0-12.8mm)、8.0(5.9-10.7mm)、7.3(3.6-13.2mm)、ミナミテナガエビでは6.1(4.2-10.1mm)、4.9(3.6-9.8mm)、6.3(4.6-7.5mm)、スジエビでは5.2(5.2-5.3mm)、5.6(5.4-5.7mm)、5.5(4.8-6.2mm)、スネナガエビが5.6(5.0-6.7mm)、6.2(4.6-10.2mm)、(10月は採集されず)、ヌマエビでは3.8(3.2-6.5mm)、4.3(3.0-6.8mm)、4.4(3.9-5.1mm)、トゲナシヌマエビでは4.8(4.4-5.3mm)、3.6(2.3-4.8mm)、(10月は採集されず)、ツノナガヌマエビは9月にのみ採集され3.3(2.4-4.7mm)であった。どの種も晩夏の8月～9月に小型個体が出現する傾向を示した。

今回採集されたスジエビは平均甲長5.2-5.6mmの小型個体であり、成熟個体は採集できなかった。今後成長した個体の生息を確認する必要がある。



図1 奄美大島嘉徳川の採集調査地点



図2 同所的に生息するスネナガエビ

引用文献

- 鈴木廣志・大元一樹・光木愛理 2015. テナガエビ科スジエビの奄美大島における初記録.
Nature of Kagoshima, 41 : 191-193.